

聖戦論（1）

— 神々の戦い、十字軍、ジハード —

Overview

- 古代世界の場合
- キリスト教の場合
- イスラームの場合

古代世界の場合

神々の戦い

バビロニアの『エヌマ・エリシュ』、ヘシオドスの『神統記』などに「神々の闘争」神話が見られる。これらは、古代世界における神聖政治と表裏一体の関係にある。

イスラエルの歴史（ヘブライ語聖書）

- 戦争は「主の戦い」（サムエル記上18:17）と呼ばれた。
- 「あなたの意のままにあしらわさせ、あなたが彼らを撃つときは、彼らを必ず滅ぼし尽くさねばならない。彼らと協定を結んではならず、彼らを憐れんではない」（申命記7:2）。
- 「彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くした」（ヨシュア記6:21）。
- 「このように、主よ、あなたの敵がことごとく滅び、主を愛するものが日の出の勢いを得ますように」（士師記5:31）。



十字軍のコンスタンティノープルへの入城（ウジェーヌ・ドラクロワ、1840年作、ルーブル美術館所蔵）

十字軍（1095～1270年、8回の遠征）

- ウルバヌス二世のクレルモン会議での演説（1095年）：「かくて互いの間に平和を保つことを約したおん身らは、東方の兄弟たち、神に背く呪われた種族の脅威にさらされている兄弟たちを、救う義務を負っているのである」。
- ウルバヌス二世による十字軍の呼びかけには、異教徒によって「汚染」された聖地を「浄化」しなければならない、という主張があった。また、人々の間には**世界の終末**が近い、という期待があった。
- 十字軍以降、ムスリムはキリスト教徒にとって大きな脅威と見なされ、しばしば「悪魔」そのものとさえ見なされた。

イスラームの側から見た十字軍

「一九八一年三月、トルコ人メフメト・アリー・アージャはローマ法王を射殺しようとしたのであったが、手紙のなかで次のように述べている。〈私は十字軍の総大将ヨハネ・パウロ二世を殺すことに決めた〉。この個人的行為を超えて明らかになるのは、中東のアラブは西洋のなかにもいつも天敵を見ているということだ。このような敵に対しては、あらゆる敵対行為が、政治的、軍事的、あるいは石油戦略的であろうと、正当な報復となる。そして疑いもなく、この両世界の分裂は十字軍にさかのぼり、アラブは今日でもなお意識の底で、これを一種の強姦のように受けとめている」（マアルーフ『アラブが見た十字軍』454頁）。

ルターの場合

（『トルコ人に対する戦争について』1529年）

- 「教皇が**アンチ・キリスト**であるのと同様に、トルコ人は肉体をもって現れた悪魔である」（『ルター著作集』第1集第9巻、40頁）。
- ルターは、イスラームを終末時のアンチ・キリスト的な権力として解釈した。教皇制とイスラームを並置することによって、彼のカトリック教会像をイスラームにも投影することになり、結果的に、イスラームを、行為（業）による義を説く宗教としておとしめることになった。ただし、ルターは十字軍政策から距離を取っていた。

- 「アンチ・キリスト」とは？
- 「子供たちよ、終わりの時が来ています。反キリストが来ると、あなたがたがかねて聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れます。これによって、終わりの時が来ていると分かります。」（「ヨハネの手紙一」2:18）
- イスラームの終末論にも類似的な考えがある。救世主マフディーの到来、偽救世主ダッジャール（≒アンチ・キリスト）の到来。
- なぜ、ルターはカトリックとイスラームを対置させたのか？
- プロテスタント原理（特に、信仰義論）との関係

潜伏する十字軍的思想

「制度化された十字軍が終了した後も、キリスト教の絶対性を前提とする聖戦意識や十字軍によって呼び起こされた浄化志向が、必ずしも人々の意識から消滅することはなかった。しかもそれは、十字軍を否定したはずのプロテスタンティズムのほうに強く現れる。」

（山内進『十字軍の思想』157頁）

イスラームの場合

ジハード

- フランク軍（第2回十字軍）への対応の中で、それまで廃れていたジハード思想がよみがえる。ヌールッディーン（ザンギー朝第2代君主、在位1146-74）は、中東イスラーム世界の再統一を目指し、ジハードを宣言した。
- ただし、ジハードの解釈は一義的ではない。

防衛的ジハード

- 「イスラームの家」を異教徒の侵略から守る防衛的な戦い。
→ 正戦論
- 「汝らに戦いを挑む者があれば、アッラーの道において堂々とこれを迎え撃つがよい。だがこちらから不義をし掛けてはならぬぞ。アッラーは不義をなす者どもをお好きにならぬ」（Q2:191）。

革命のジハード

- イスラーム世界の浄化と境界の再設定を目指す。→ 聖戦論
- （特徴）善と悪の存在論的・二元論の立場。無差別攻撃をも容認し得る絶対的な目的。ジハードの戦死者には殉教者として楽園（天国）が約束されるという終末論（来世観）。
- 自国内におけるジハード（「近い敵」に対して）：腐敗した政治体制の打倒を目的とする。例：エジプトのジハード団によるサダト大統領暗殺（1981年）。
- 国際社会におけるジハード（「遠い敵」に対して）：イスラーム世界に対する敵対勢力（主としてアメリカ）の打倒を目的とする。グローバル・テロリズムの源泉の一つとなる。例：アルカイダによる暴力的活動（9・11同時多発テロ事件を含む）

【参考文献】

- カレン・アームストロング『聖戦の歴史——十字軍遠征から湾岸戦争まで』（塩尻和子、池田美佐子訳）柏書房、2001年。
- 山内進『十字軍の思想』筑摩書房、2003年。
- ジョルジュ・タート『十字軍——ヨーロッパとイスラーム・対立の原点』（池上俊一監修）青土社、1993年。
- アミン・マアルーフ『アラブが見た十字軍』（牟田口義郎、新川雅子訳）筑摩書房、2001年。
- 池内恵『現代アラブの社会思想——終末論とイスラーム主義』講談社、2002年。